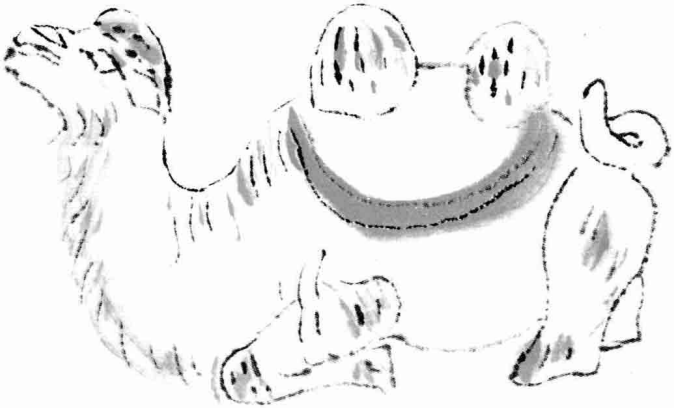
# 自由を生きる

## 奇妙（きみょう）な家出少年の歩み

江口 幹

ちくま少年図書館 45
心の相談室



# 自由を生きる

## 奇妙（きみょう）な家出少年の歩み

江口 幹

ちくま少年図書館

心の相談室

289／自由を生きる——奇妙な家出少年の歩み

**著者略歴**

1931年，岩手県に生まれる。旧制私立成城中学3年中退。15歳で家出。アナキズム運動や労働運動にたずさわったあと，さまざまな職を経て現在に至る。主な著書に『方位を求めて』『黒いパリ』『評議会社会主義の思想』などがある。

筑摩書房／1980年初版
247pp.／18.8cm／四六判

1980年1月20日　第1刷発行

著　者　江口　幹
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2—8
電話 東京 (291) 7651 (営業)
(294) 6711 (編集)
郵便番号101-91／振替東京6-4123

© K. Eguchi, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8095 (製品) 04045 (出版社) 4604

# 自由を生きる——奇妙な家出少年の歩み——

もくじ

## 家出

東京にゆきさえすれば　見知らぬカーテン　当座の宿が見つかる　家出の原因　日本の敗戦　態度をかえたおとなたち　日本軍への失望のはじまり　社会主義への関心　天皇が消えてゆく　新聞社の給仕になる　おとなの世界への不安　学校へいってみないか　中岡支社長の家に移る　給仕の生活　受験の失敗　学校なんかいくものか



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

## 平民新聞の欠食児童

岩佐作太郎老人　アナキズムとは　平民新聞　編集室をたずねる　革命運動にはいりたい　めしを食ったかい？　監獄で知ったぜいたく　若もののいらだち　失敗した計画　大阪へゆく　おとなになった気分

## ある実験生活

労働運動のなかで　自由社会主義同盟　自分のしていることへの疑問　思いあがり　失業　自分を考える　病気とつらい気持　どうすれば自分を確立できるのか　自分を見つめる　おっくうな毎日　少しずつの歩み　たいへんな発見　生きる張りをなくす　中国の俑　人間の可能性　世間という書物

## 時代に背を向けて

交通経済新報　取材のコツ　自分の好みが生まれる
人と人とのつながり　さまざまな世界　編集をまかされる　女性について　仕事のなかみの変化　時代の流れに背を向ける　予言的なことば　退職
やるべきことを見つけたい　胸のおくにつかえていること

## フランスにて

外国へ　パリでの生活　好きな道　パリの日本人
パリのアナキスト仲間　ものの見方の変化　シャルトルへ　ゆるやかな時の流れ　ひとりの日本人青年
のぞましい方向とは

自分の道をつかむ

はじめての翻訳本　たどりついた自分の場　文明のあり方をどう見るか　ひととちがうことの大切さ

自分のことは自分で決める　部分としての人間　出発点

あとがき


さし絵　佐伯和子

# 家出

## 東京にゆきさえすれば

ぼくは十五歳だった。家出をした。鹿児島から汽車にのって、東京にきた。敗戦のよく年、一九四六年八月のことだった。

真夏で、暑さがこたえた。車内は、ひどくこみあっていた。ぼくはかろうじて通路にすわりこんだ。そこに腰をおろし、ひざをかかえっぱなしの長い旅だった。体のどこかが、いつも、だれか他人の体にふれつづけた。汗にもまみれたけれど、なによりも腰がいたかった。そのころ、鹿児島から東京へは、四十時間あまりかかった。車中で二泊もした。東京についたのは、正午よりは少しはやい時刻だった。

ぼくは、トランクひとつさげて列車からおりた。東京駅は、まえの年の空襲で焼けてい

た。ホームはでこぼこだった。屋根はなく、火をくぐった支柱の、鉄骨だけが残っていた。昇降口の壁にはどれも、火の走ったあとが、黒くまだはっきりと見えた。

列車をおりた乗客たちの流れができていた。出口や、のりかえのため、ほかのホームに向かう人たちだった。その流れのなかで、ぼくはふと足をとめた。家を出てきたのは、東京ではなにかがぼくを待っているはずだ、と思いこんでいたからだった。東京にゆきさえすれば、なにかすることがある、というつもりでいた。しかし、実際についてみて、まずどこにいったらいいのか、今夜からどこに泊まったらいいのか、という現実的な問いに、はじめて直面した。はっきりとしたあてはないのだった。ぼくは、人の流れからはずれ、ホームのかたすみへゆき、トランクをおろした。そこでしばらくたたずんでいた。

一時間あまりのち、ぼくは世田谷のある町を歩いていた。前年の五月二十五日の大空襲で、奇跡的に類焼をまぬかれた区画だった。まわり一面に焼け跡がひろがり、防空壕や掘っ立て小屋で人が暮らしているのに、その一帯だけ、以前からの住宅が残っていた。そこに、ぼくが小学校なかばごろからずっと育った家があった。つい半月ほどまえまで、家族とともに住んでいた家だった。しかし今は、売ったので他人のものになっていた。

父は軍人だった。大戦中、フィリピンのある部隊の指揮官だった。敗戦で投降し、捕虜



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

収容所にいて、この年の一月、復員した。それから、第一復員省と名をかえていた、もとの陸軍省に、残務整理のためかよっていた。それが六月に終わった。それでぼくらの一家は、東京の家をたたんで、父の郷里である鹿児島に、八月のはじめに帰ったのだった。

その鹿児島に、ぼくは正味十日ほどいた。それだけいて、ほとんど折り返すように、東京に家出してきてしまった。敗戦直後のことで、日本の社会は混乱していた。そのなかで、どんな歩みをしていったらいいのか、日本はおおいにゆれていた。せいぜいこの二、三年の動きのなかで、これから先の日本の運命が決まってしまうような印象を、ぼくはうけていた。できればそういうなかで、なにかをしたかった。鹿児島についてからは、こんなところにいては、時の流れから取り残されてしまう、という思いがつのってきてならなかった。東京にもどりたかった。それが下地としてあったので、ちょっとした父とのいさかいがきっかけとなって、家を出てしまったのだった。

鹿児島にいるあいだは、東京に帰りさえすれば、とそのことばかり考えていた。帰れば、自分のなすべきことがそこにあるような気持になっていた。しかし、きてみれば、それが錯覚であると思い知らされないわけにはいかなかった。実際に東京駅でたたずんでみると、ここでどうしたらいいのか、まるでわからない自分だった。世の中には、夢想だけではなくて、現実というものがあることを、考えざるをえなかった。まず第一に、どこかに泊ま

り、食べ、ということが、生きてゆくうえには必要なんだと、ホームのすみに足をとめてみて、やっと実感できたのだった。

## 見知らぬカーテン

東京に親戚がないのではなかった。しかし、たずねていってやっかいになるほど、親しくはなかった。仲のよかった学校友だちの二、三も思い出されたが、みんな疎開したまま、まだ東京に帰っていなかった。しかし、いつまでも東京駅にいるわけにもいかない。しかたなくぼくは、十年ちかくをすごした、かつての自分の家を見てみる気になったのだった。

子どものころ見知っていた町並みにはいっていた。そこをまがると、メンコやベーゴマを売っていた駄菓子屋があるなとか、もうすぐなになに君の家のまえだな、と頭にひらめいた。しかし、いったん引っ越した町に、また足をふみ入れるのは、とがめだてされかねない、わるいことのような気もしてきた。ぼくはこっそりと歩いた。

ついこのあいだまでの自分の家が見えてきた。門と生けがきが目にはいった。そのまえをぬけてゆくのに、足がつっぱったようで、思うようにすすまなかった。少しへっぴり腰になっていた。門からややななめにはいった位置に玄関があり、そのわきに応接間があった。いすが楽なので、ぼくは、そこをもっぱら書斎がわりにして、よく本を読んだものだ

った。その応接間の窓に、ぼくの目には趣味のわるいと思われた、けばけばしい見知らぬカーテンがさがっていた。なにか変な気分だった。ああ、やっぱりもうぼくの家ではないのだな、という思いが強くした。

ぼくは中央線の電車にのっていた。いろいろと考えあぐねたすえ、結局、康夫さんのところにゆくよりしかたがない、と決めた。康夫さんは、一時、ぼくの家で世話をしていたことのある、T大工学部の学生だった。ずっと、というのは無理にしても、当座はころがりこましてくれるのではないか、という気がしていた。康夫さんの下宿は吉祥寺にあった。

住所をたよりにさがしあててみると、門がまえのある、ふつうの家だった。そこの二階の四畳半を、康夫さんは借りていた。さいわい、留守ではなかった。

とおされた部屋はせまかった。乱雑だった。机ひとつと、壁ぎわには本がつみかさねてあった。万年床がしかれていて、すわる場所もない。康夫さんがふとんをめくりあげた。

「どうしたんだ、いったい。鹿児島に帰ったんじゃなかったの」

「帰ったけど、出てきちゃったんです」

「どうして」

「どうしてって……」

ぼくは返事に困った。整然といえるような、はっきりした理由はなかった。

「おやじとけんかしたから」

「なんでけんかしたんだ」

「うーん。ほんとはよくわからないんです。鹿児島に帰ったものの、ここに長くいちゃいけない、こんなところにいたら、世の中の動きからおいてけぼりをくっちゃうって気が強くして、東京にもどりたかった。でも、おやじとけんかして、家を出てきてしまったのは、はずみです。ほんのはずみでした」

「はずみねえ、まあ、そんなものかもしれないなあ。しかし、お母さんは心配したんじゃないの。いいのかい」

「しかたがない、と思ったようですね。今までもぼくは、どうしてもやりたいってことはやってきたし、反対してもしようがない、と思ったんじゃないですか。しっかりやれっていってました」

ぼくの母方の祖父、つまり母の父は、十歳のとき、まだ幕末のころだが、越前丸岡の郷里から、歩いて江戸に出て、儒学者である安井息軒の塾に内弟子としてはいっていた。男の子はそれくらいでなくては、と母がよくいっていたのをぼくは思い出した。

## 当座の宿が見つかる

康夫さんは、灰皿をあさって、すいがらをひろいだした。きせるの先につめて、火をつけて吸った。

「これからどうするつもりなの」

「なにかやるべきことがあるはずだと思うんで、さがすつもりです」

「やるべきこと？　すごいねえ」

康夫さんは、十五歳の少年の、気負いこんだおおげさないい方に、笑いだした。

「学校にはいかないの？」

ぼくは、順調にいっていれば、いわば旧制中学の四年生だった。しかし、三年の秋からズルズルと学校にはいかなくなっていた。

「いく気はありません。おもしろくないし、先生たちはインチキくさいし」

「うん」

康夫さんは、少し真顔になってだまりこんだ。

「康夫さんのほうはどうなんですか、学校は」

「おれ？　おれのほうもつまらないねえ。飛行機がだめになっちまったろう、自動車のほうにかわったんだけれど、おもしろくないね」

康夫さんは、戦時中は航空機のエンジンが専攻だった。ところが、敗戦後、占領政策として、日本での航空機生産が禁止されたから、自動車用にかわらざるをえなかったのだった。

「ところで、その、するべきことはまあいいとして、これからどうして暮らしてゆくつもり？」

ぼくはちょっとことばにつまった。ためらいが走った。しかし思いきっていった。

「じつは、それでお願いがあってきたんです。どこかが決まるまで、しばらく置いてもらえませんか」

「ここにか」

康夫さんは、きたない四畳半を見まわして、

「いいよ、こんなとこだけど」

と、あっさりいってくれた。

これで、当座の宿が決まった。安心した。

「すみません」

と、ぼくは頭をさげた。

「ところで、カン君、お金はあるの」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com